

生きる力（一）

甲「以上お話しいたしましたように、私は長い年お寺参りしたのですが、こんな苦しみの中に落ちますと、未来死んでからお浄土にゆくなどと、今日の生活との間には何のかわりもない気がいたします。ただ私はもう生きることに何の望みも力もありません。」

乙「よくわかりました。続いてあなたのお話を聞いていて、あなたのみ心をつぎのごとくまとめることができます。」

1、あなたは悲しい未亡人であります。嬢さんが女学校二年、坊ちゃんが尋常五年と三年、あなたが三十六歳。

2、ご主人の恩給があつたりして今日食うにすぐ困るというのではないが、生活もそれだけでは到底やっていけない。遺産も残り少なくなった。

3、未亡人として今日までやってきたが、主人の愛は忘れられず、再婚する意志は毛頭ないこと。それに親族などから無理解に結婚せよとせめること。

4、今日まで男子の誘惑と戦ってきた。つまらない世間の誤解もたびたびあなたを暗くした。

5、不幸の上にもさらに坊ちゃんは足をわずらって僅かではあるがビッコになった。それだけでなく、嬢ちゃんが病気がちで、医師の治療でもなかなかよくならないので、科学の力ではいけないと思つて、近ごろはお大師さんを信じて病気が治るよう

に祈っていること。

6、お子様方は全部あまり秀才ではない。秀才ならばその上に希望をかけるということもあるが、それもだめであるから、生きる望みがない。

7、そこで奥様はまったく生きる望みがなくなったので、むしろ死んでしまった方がいいと思う。

8、仏教などというものは、今の奥様などには関係はないものだと思う。

以上でだいたいあなたの言われたことはつきると思ひます。まことに不幸のお身の上でご同情申しあげます。

以下私の考えを述べさせていただきます。

一、まずあなたに第一に申しあげたいことは、ご同情はいたしつつもあなたの生き方はまったくなくなっていない、大法から見た時、模範型の迷いを続けていられるということです。

二、あなたは仏教とはまるで死んだ先のことで、今日の生活とかけはなれたことばかりを考えているもののようにお考えになつていられます。それがたいへんな間違いです。仏のみ教えがちつとも生きていないからこそ今日のあなたのその暗い生活があるのです。仏教は教えによつて生きる道をはつきりしようというのです。

三、あなたの宗教心は、尊い仏教の真理の程度において現われないうで、二人のお子様のご病気を悲しんでお大師さんにお祈りするという迷信の程度において表わされています。」

甲「えっ！　そうでしたか。私は仏教はつまらないと言ったより先に、いつも聞かされていた雑行雑修自力に陥っているのですね。」

乙「そうです。強いようでも人間は苦悩の中に落とされるとすぐ、自分の正体をありのまま暴露するのです。あなたは、耳で聞いているままで、いざとなれば、あなたの真の生活の態度をそのまま赤裸々に見せたのです。」

四、あなたは、たいへんに暗い顔をしていられます。それも無理はありませんが、まるで幽霊のような顔色です。あなたは今、寂しいでしょう。世間が呪わしいでしょう。『たった一人だ、だれも力になぞなるものか、世間には油断などのできる者は一人もいない。みな勝手な、欲張りの利己主義者ばかりで、鬼ばかりだ。』と。」

甲「そうです。私はそう思っています。そしてみなおもしろそうに笑っています。私ほど不幸なものがおるものですか。」

乙「あなたはまったく孤立しています。世間からも、人からも孤立しています。しかしそれはすねているのです。呪っているのです。悲観厭世の極に沈んでいるのです。けれどもそれは正しい生活態度ではありません。」

五、つぎにあなたは三人のお子様方、しかも不具や病気のお子様方に対する愛に欠陥があります。あなたは、お三人ともにりっぱな成績であり丈夫であれば、先に希望もあるが、三人ともそれでないから生きる望みもないと言われますが、はたしてそうでしょうか。三人のお子様から言えば、天にも地にもかけがえのないお母様ではありませんか。私は奥様の愛を疑います。お丈夫でなく、成績が優等でないからこそ、お母様がいなくて何としましょう。あなたの母としての認識や愛がはつきりしていません。お母様が三人の不幸なる魂の下敷になつて、火の中、毒の中、いかなる苦しみでも生きてやらないで、だれが生きてやりますの。

六、世間の誤解や誘惑も、それほどたいしたことではありませんか。それはあなたがもつと強くおなりになれば解決する問題ではありませんか。」

甲「聞いてみますと私はたいへんに間違いを考えていました。私はどうすればいいの
でございましょう。」

乙「そこで私はあなたに申しあげます。人間の生き方には三通りあります。」

第一は、享楽主義の人です。

第二は、悲観主義の人です。

第三は、正しき信の人です。

人生は太く短く楽しく生きて方がいい、というので、魂の声を殺して、本能的満足、肉体的歓楽を追うてゆく浅薄な人生の肯定者です。積尊はこの第一の生活は、あまりに恐るべき無自覚、無意味であることをさとられ、また覚めた魂はこれで満足することはできません。あなたはこの人間的幸福を奪われ、第二の人生の暗黒面ばかりを見て、悲観厭世、人生を呪わしいと見る人になつてしまつたのです。そしてそのすねた生き方がいつのほどにか、人間は独立して助け合い信じ合つて生くべきであるのに、社会や、親族や、人々から水と油のようにまったく孤立してしまつたのです。しかし私はある意味からあなたのために喜ばずにはいられません。なぜならば、あなたには笑いというものがない。過去の一切の浅薄な笑いというものが虚

偽であつたことがわかつています。あなたには一切力となるものがないことがわかつています。単なるあきらめも役立ちませぬ。いいかげんな弥縫もつまりませぬ。限りある人間の同情も真の力ではありません。泣いていたのでも解決はつきませぬ。一家四人心中は私が許しませんし、それは真の超越でないかぎり、あなたのさめた心が許しません。ついにはあなたにはたった一つの生き方があるだけです。」

甲「……………」

乙「ここで何かが、何かが生きてこなければ、あなたは生きられません。」